

氏名（本籍）	フク イ ナオ コ 福井直子（岐阜県）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第183号
学位授与年月日	平成19年3月26日
学位論文等題目	〈作品〉絵のある部屋 他 〈論文〉「絵のある部屋」～絵画と理想の空間～

論文等審査委員

（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	坂田哲也
（論文第1副査）	〃	助教授	（ 〃 ）	布施英利
（作品第1副査）	〃	教授	（ 〃 ）	羽生出
（副査）	〃	〃	（ 〃 ）	佐藤一郎
（ 〃 ）	〃	助教授	（ 〃 ）	工藤晴也
（ 〃 ）	〃	教授	（ 〃 ）	絹谷幸二

（論文内容の要旨）

私は、絵画を取り巻く周りの空間を、自分のモノで埋め尽くして「絵のある部屋」というタイトルで一つの空間を制作している。白い壁に絵画を並べてただ展示するのではなく、例えばお茶ができるような寛げる空間の中で絵画を眺めていたいという、思いから「絵のある部屋」を制作し始めた。眺めているだけでワクワクするような家具などに囲まれて、いい雰囲気の中で絵画を飾り、私だけの特別な空間にいる充実感・至福の時を味わえるようなそんな空間を私は目指している。それは、理想の生き方や豊かな暮らしとは一体何か？という事を自分自身に問い正している。

第一章「自然」では、絵画のモチーフとして、そして私が作るモノに装飾するものとして取り上げる自然について書いた。当たり前なことだけど、自然と共存しなければ生きていくことができない。私は自然を身近に感じていたいと思う反面、自分の中では自然との距離ができ離れている。荒々しい自然が良いとは分かっているのに、そういう自然は怖く近寄りがたく、そして自分の生活も確保したいから、自然を知らないうちに排除してしまっている。そんな矛盾を私は生まれ育った岐阜と、現在暮らしている東京という、違う環境を行き来することで感じる。岐阜の自然の中で遊んでいた頃の記憶は、楽しかった思い出しかなく、自然に対する知識や経験はうろ覚えで忘れてしまった。忘れてしまったから自然が怖く、人の手で管理されているような木や花しか今では安心して接することができなくなった。このようなどうしようもないもやもやる気持ちを心に留め絵に描くことで、私なりに考えて、自然をモノに装飾するという事で、少しでも自然を身近に感じていたいと思う。

第二章「豊かな生活」では、良いモノに囲まれて生活する豊かな時間・生きる喜びについて書いた。生活を豊かにするものとして家具や食器、服や絨毯などのテキスタイルなどのモノはとても重要である。モノにこだわりを持ち、生活に美を取り入れたのがウィリアム・モリスである。モリスは、その時代、高度な機械の発達に警鐘を鳴らしモノを作る喜びを訴え、そしてただ生活するのではなくいかに豊かに生きるかを追求した。柳宗悦も、工芸の美について問い、そして味気ない日々も美しい工芸に彩られ心も豊かになることを述べた。現代においても、その追求は続けなければいけない、と私は考える。しかし、私が作っているモノは、柳宗悦の言う正しき工芸・美しき工芸という観点から見ると、技術もなくみようみまねの駄目なモノだ。けれども私は、技術を極めて工芸品を作るということよりも、自分が良いとするモノに囲まれて、豊かな時を過ごす大切さということに重点をおきたい。作るモノの完成度は、私の今後の課題だ。

そして、日本の茶室には、日常生活とは違う特別な場所で豊かな時が流れている。特別な場所だからこそ、日常の煩わしさを忘れ、その一瞬一瞬の時を感じ心ゆくまで楽しめるのかもしれない。そういう特別な場所と日常を行き来することで、日常にも影響し、豊かな生活を送ることができる。私はそんな特別な場所を「絵のある部屋」と称して制作している。

第三章「絵のある部屋」は私の制作している作品について書いた。自然を身近に感じ、自分の良いとするモノに囲まれ、絵を眺めていたい。そんな豊かな時の過ごし方を、私は「絵のある部屋」に詰め込んで、自分だけの特別な空間を作ってきた。

四辺を切り取ったキャンバスは、現実と想像の世界を行き来するあっちとこっちをつなぐ窓枠である。具体的に言葉で示されなく固定概念もなく、見る側がイメージを膨らませ色々な見方ができる。例えばマチスやブラックの絵は、私に色々な想像力を与えてくれる。具体的に細部まで描いてなくても、実物を見るより頭で創造するほうがよりリアルにその場の雰囲気が伝わる。私は日常で目にする矛盾や気になる場面を線と面と色で単略化して切り取り、絵の画面に持ってきて、そのモノを描くよりもそのモノの雰囲気や空気、そして私の気持ちをイメージできるように描きたいと考えてきた。線と面と色の関係はとても重要である。線で実物のモノをキャンバスに描くということは、自分の中にそのモノを取り入れる行為であり、私というフィルターを通してモノを線に還元している。くくられた線の中の形、面で、その時の記憶や考えたこと、思ったことを色にして置いていく。線の色と面の色の関係で、言葉では言い表すことができない“霊力”みたいなものが表せられたらと思いついて描いている。そんな絵をさらに盛り立てる額装か、装置かのように自分のこだわったモノを置く。無機質なものではなく、楽しく見ているだけでもワクワクするような温かみがあるモノに囲まれて、特別なひと時が過ごせるような空間を私は目指している。